

# 島の暮らしを第一に考える 観光地域づくり

NPO法人おちかアイランドツーリズム協会

木寺 智美

日本のどこにでもある、観光地ではないごく普通の田舎。観光するところは特にないが、のんびりとした時間だけは十分にある——私たちは観光案内の中で、こうした言葉を来訪者に伝えてきた。現在、離島観光をめぐっては「もう一泊」という言葉がしばしば用いられる。短時間の訪問にとどまらず、島で過ごす時間をどう確保するかという視点は、人口規模や交通条件に制約のある地域にとって重要なテーマである。一日でも長く滞在してもらい、結果として地域への経済的な波及を高めていくことが、観光に求められる役割とされている。もっとも、小値賀島の場合、佐世保や博多から定期船が就航しているものの、本土からの日帰りはほぼ不可能であり、短時間の滞在で島の魅力に触れることが難しい。だからこそ我々は団体の活動の初期段階から、「暮らすように旅をする」という考え方を大切にし、島の暮らしや人の営みそのものを体験してもらう形を模索してきた。

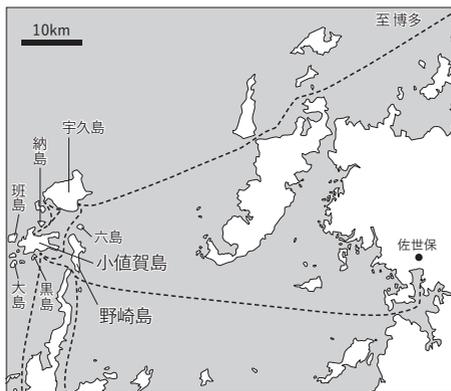
本稿では、小値賀島での滞在型・体験型観光の実践を振り

返りながら、結果として滞在が深まった背景を整理し、今後の島の観光のあり方を考えてみたい。

## 観光をとりまく島の暮らし

小値賀町は、長崎県五島列島北部に位置する人口約二〇〇

〇人の小さな自治体である。有人七島、無人一〇島の計一七の島々から成る。面積は五島列島全体のわずか四パーセントに過ぎない一方で、遺跡数では同全体の約三割を占め、約二万五〇〇〇年前の後期旧石器時代の遺物が出土するなど、歴





ありのままの島暮らしを体験する「島らいふ」。

史的に非常に奥行きのある地域である。

小値賀での観光は、「島の暮らしを第一に考える」を前提に展開されてきた。観光は目的ではなく、あくまで地域の暮らしを支えるための手段であり、住民生活と補完的な関係にあるべきものだ、という考え方である。観光客だけでなく、「来訪者」として島に来られる人々に、島の暮らしそのものを体験してもらうことを大切にしている。

小値賀島への来訪者は、コロナ禍によって一時大きく減少したが、現在は徐々に回復しつつある。ただし、コロナ以前の水準に完全に戻ったとはいえず、回復途上にあるのが実感である。来島時期は、連休や夏季に集中する傾向が続いている。しかしながら、気候的には春や秋こそ小値賀島の滞在に適しており、この時期にも島の魅力を感じてもらえたら、と考えている。

小値賀町は、長崎県内で最も高い高齢化率を示し、担い手不足が深刻な課題となっている。ただし、島の人々は非常に働き者であり、六〇歳でも「まだ若い」といわれることが珍しくない。本協会が事務局を担っている「おぢか民泊（ホームステイ）」では、七〇歳を超えるお母さんたちが現役で受け入れを続けている。

一方、五〇代・六〇代の方々もまだまだ現役として、漁業や農業などの一次産業に従事しており、観光を組み合わせる

ことがかえって負担になる場面もある。しかしながら、観光客の力を借りることによって、地域経済循環が効率よく回る側面があることも事実であり、観光が島に与える影響は想像以上に大きいと感じている。

こうした状況を踏まえ、引退世代などをうまく巻き込みながら、無理のない関わり方を模索している。一次産業に携わる人々の中には、観光を自分事として捉えにくい方も少なくない。そのような方々にも、観光を暮らしの延長線上で無理なく活かせる関わり方が求められている。観光が地域住民にとって負担ではなく、「楽しさや生きがい、働きがいにつながる（つなげる）」視点を何よりも大切にしている。

## 子ども向け滞在・体験型観光プログラム

小値賀町における体験型観光の原点は、「野崎島自然学塾村」にある。同村は、廃校となった旧小値賀中学校野崎分校舎を活用した簡易宿泊施設であり、子ども向けの自然体験や宿泊プログラムを中心に、滞在型の取り組みを行ってきた場所である。ここで始まった取り組みは、現在の「宝島キャンプ」や「島らいふ」へと形を変えながら、二〇年以上にわたって継続してきている。

「宝島キャンプ」では、野崎島自然学塾村を含む、簡易宿泊

施設に寝泊まりしながら、島の自然の中で数日間を過ごす。じつは、島での時間は、島へ来る船旅から始まっている。小値賀島を訪れる子どもたちは、同じフェリーに乗るため、船の中で自然と会話が生まれ、到着する頃にはすでに打ち解けていることも多い。海を渡る時間そのものが、子どもたちの距離をゆっくりと縮めていくのだ。

実際にはキャンプが始まって、指示がなければ動けない場面も少なくない。しかし、いつの間にか役割が生まれ、声を掛け合い、助け合うようになっていく。特別な演出を用意しているわけではないが、自然の中で過ごす時間そのものが、子どもたちの関係性をゆっくりと変えていく。

また、「島らいふ」では、島の一般家庭にホームステイをする。三人から五人ほどの子どもたちが一つの家に入り、食卓を囲み、食事の準備や片付けを手伝いながら、島の日常をとにもする。家庭菜園で収穫をしたり、釣りをしたり、島のことを話したりしながら、普段と変わらない時間を過ごす。

子ども向けのプログラムを長年続ける中で、多くの印象的な場面に出合った。ある時、一人の子どもがふざけて管理人が大切にしていたハマユウを引きちぎってしまったことがあった。それに気づいた子どもたちは、「見つかったら怒られる」という反応ではなく、「謝りに行こう」と話し合い始めた。一人だけではなく、全員で管理人のもとへ行こうという声か



短い時間でも絆が深まる「宝島キャンプ」。

自然にあがったという。出身地も違う、出会ったばかりの子どもたちが、短い時間の中で仲間としての意識を持ち始めていく様子に、スタッフ一同が彼らの成長を感じた瞬間でもあった。別れ際の光景も、滞在における深い絆の成果を象徴する。到着したばかりの頃は緊張して言葉数りが少ない子どもが、帰りの港では涙を見せることもある。「帰りたくない」「また来るね」と、口にする子どもも少なくない。よくしゃべっていた子が、迎えに来た保護者の前では急に寡黙になることもあり、それだけ島での時間に没頭していたのだと感じさせられる。

保護者から寄せられる感想も印象的である。離島に送り出すことは、時間的にも経済的にも決して簡単な決断ではない。子どもたち自身も、離島に行くということに最初は高いハードルを感じている。帰る頃に「また来たい」と、話すようになる子どもたちの変化を目の当たりにした保護者から「行か

せてよかった」「また参加したいと言っている」という声が届くと、島が持つ力を実感できる。

### 観光が生む好循環と新たな展開

滞在・体験型観光を続けてきてよかったと思うのは、参加した子どもたちがその後も関わり続けてくれることである。リピーターの子が初参加の子どもたちを気遣い、自然と輪の中に招き入れる姿も見られ、「次のキャンプでまた会おう!」と約束する子どもたちもいるなど、小さな循環が生まれている。実際に、高校生になってから「手伝いに行ってもいいか?」と連絡をくれる子や、「キャンプに参加していた」と再訪してくれる若者もいる。

後日届いた手紙に、魚のさばき方を教わったことをきっかけに自宅で挑戦した、と書かれていたこともある。中には、大人になっても連絡を取り続け、結婚式に招かれた例もあるという。大学進学の記事が届くこともあり、滞在が一過性の体験ではなく、人と人との関係にまで昇華していることがうかがえる。

民泊では、共働き家庭で普段は一人で食事をとることが多い修学旅行生が、皆で温かい食卓を囲む時間を「嬉しかった」と語る場面もあった。特別な体験というより、「一緒にごはん



大人向けの滞在型観光を提供する再生古民家。

を食べる」という当たり前の時間が、子どもたちの心に残っている。体験の数(多さ)よりも、過ごす時間の濃さが記憶に残るのだと感じている。

こうした子ども向けの体験を基盤としながら、小値賀町と本協会が共同で進めてきたのが「古民家再生事業」である。一棟貸しの古民家宿として整備された空間には、家族連れや個人旅行の大人が滞在

するようになった。

古民家の利用者からは、「まるで生きた歴史の中で暮らしているようだった」とい

う声が聞かれる。伝統的な建築やしつら

えに包まれながらも、現代的な快適さが備

わっており、心から落ち着いて過ごせた

という感想が多い。

田んぼや小道を自転車で巡り、地元の人

と一緒に料理を作り、

食卓を囲んで語り合う時間が特に印象に残ったという声も多く、「またこの島の時間を味わいに戻ってきたい」という言葉に、滞在の「質」が表れていると感じる。

これら滞在・体験観光の実践に共通しているのは、滞在を特別な体験として設計しすぎないことである。島に元々ある暮らしや自然、人との距離感を大きく変えることなく、そのまま差し出す。その結果として、子どもも大人も、それぞれのかたちで島の時間に身を委ねることができているのではないだろうか。

## 再評価される旅の価値と島らしさ

コロナ禍を経て、多くの人々が旅そのものの意味や大切さを見つめ直すようになったと感じている。日常から一度距離を取り、自分の内面や生き方を振り返る行為として、旅が再認識されているように思われる。

小値賀島が観光で大切にしてきた判断軸は、以前から変わっていない。それは「暮らし優先、町民第一、ホンモノ基準」という考え方であり、「暮らすように旅をする」という姿勢である。体験や滞在を設計する際には、「それは小値賀の暮らしの中に元々あるものか」「島の人にとって無理のない関わり方か」という問いを、必ず立ててきた。観光的には分かりやす

く、集客がしやすいものであっても、島の文化や生業に根ざしていないものは行なわない。住民にとって幸せな関わり方であるかどうかを、何よりも重視している。

つまり、社会の変化に合わせて新しい方向へ大きく舵を切ったというよりも、これまで続けてきた判断軸を、より丁寧に、意識的に使うようになったという感覚が、小値賀島には近い。島が大切にしてきた考え方が、結果として今の時代の価値観と重なってきており、その一環として、現在「おぢか島旅」のコンセプトについても、改めて見直しの議論を行なっているところである。これは新しい価値を打ち出すというよりも、これまで大切にしてきた考え方や姿勢を、来訪者にどう伝えるのかを整理するためのもので、島の暮らしや人の営みと向き合いながら《小値賀らしさとは何か》を、言葉にする作業を続けている。

## 他地域の観光づくりのヒントとして

小値賀では、観光客数や滞在日数を増やすことだけを目標として掲げてきたわけではない。島の暮らしや時間の流れに身を置く中で、結果として「もう少しここにいたい」と感じてもらえる状態を大切にしてきた。明確な正解やモデルを作ることよりも、その人にとって必要な距離感や関わり方が自

然に生まれることを重視している。短い滞在であっても、島の時間に触れ、また別の季節に戻ってきたいと思ってもらえるのであれば、それこそが小値賀の観光が目指す一つの姿だと考えている。

島で過ごす時間に、何か特別な出来事が起こるわけではない。むしろ、朝の港の風景や、畑の手入れをする人の姿、夕方に家々から漂う食事の匂いといった、日常の積み重ねに身を置くだけのシンプルな時間である。しかし、来訪者はこの中に入ることで、自分自身の日常や肩書きなど固まった心を少しずつほぐしていくように感じる。実際に、「何をしたかより、どんな時間を過ごしたかが印象に残っている」という感想を聞くことも多い。観光地を巡る旅とは異なる、暮らしの延長線上にある滞在だからこそ、残るものがあるのだろう。今後、観光の拡大そのものを追い求めるのではなく、住民の暮らしを第一に考えながら、無理のない受け入れを続けていきたい。小値賀の取り組みが、そのまま他地域の参考になるとは限らないが、観光と暮らしの関係を考える際の、一つの手がかりになれば幸いである。

### 木寺 智美 (きでら ともみ)

二〇一二年に神奈川県から「おちかアイランドツーリズム協会」の職員として小値賀町へ移住。古民家宿の管理運営や観光ワンストップ窓口業務の責任者を経て、現在は事務局長として、組織運営および地域観光のマネジメントに携わっている。